

伊庭想太郎編(5)

教育者

家塾で要人子弟を鍛える

四谷に「文友館」を開く

青雲の志を抱いて、伊庭想太郎が沼津から上京したのは明治7年(1874)ごろ、20歳代前半のことと思われる。

想太郎の将来について、養父秀俊は仕官の道を探ったが、恩師中根淑は反対した。「つまらぬ役人をするよりは学問の方で何かするのが宜しい。(略)今日、武芸はあまり用のない方だから…」＝中根『伊庭ものがたり』

武芸の名門を継ぐ秀俊は不本意だったに違いない。想太郎も素直にうなづく心境ではなかっただろうが、仕官の道は断念した。1年間、工部大学校(東大工学部の前身)で学ぶ一方で、秀俊の死後、心形刀流の第10代当主として学習院などで剣術指南もしている。

明治10年、四谷仲町に家塾「文友館」を開設した。

旧唐津藩の小笠原長行の知遇を得たのが、きっかけだった。かつて幕府老中も務め、箱館戦争で榎本武揚軍と行動をとともにした長行は、想太郎の兄八郎の働きもよく知っていたのだろう。想太郎は、小笠原家の家事の補佐と、長行の長男である長生の教育を委嘱された。

の教育を委嘱された。

「世ニ後レタル」の自覚も

「文友館」は長生だけでなく、華族や要人の子弟を預かる家塾で、その意義について、後に想太郎自身が語っている。

「(私ハ)素ヨリ武人デアリマスガ、私如キ世ニ後レタル人間ノ出来ルコトヲ憂ヒ、学生ノ世話ヲスルノガ尤モ世ノ為ニナルト考ヘマシタ。貴族ノ子弟モ他ノ学徒モ惰弱ニ流レルコトヲ防ギ、有為ノ士ヲ出スコトヲ欲シマシタ」＝星亨刺殺事件の予審調書

剣術だけでは世を渡っていけない。「世ニ後レ



文友館時代の想太郎(後列、和服姿)、小笠原長生(前列左から3人目)佐藤鉄太郎(同4人目)＝花井卓蔵著『訟庭論草』所収

タル」という表現に、想太郎の鬱屈がややうかがえる。

文友館の塾生は、100人を数えたこともあったという。ここから、学習院などの各学校に通う。朝夕には付設の道場で剣術の稽古をした。後に海軍で名を成した長生のほか、塾生からは、佐藤鉄太郎(海軍中将、貴族院議員)ら多くの人材を輩出した。彼らの回顧談を長生が記録している。

「先生は朝が早かった。我々が寝ていると、木剣を掲げて、起きろ起きろって、起こして回られた。(略)寝ぼけ面なぞでもじもじしていると、ピシリピシリとやられる…」[生粋の江戸弁で歯切れがよくて、(略)先生に押入れへほり込まれた時には、へえれ、へえれって、これも(略)巻き舌だった]＝長生『伊達の兄弟』

想太郎は明治21年、小笠原家に仕えていた女性と結婚した。その妻貞子と子ども3人で、穏やかな家庭を営んでいる。

小笠原長行(ながみち)(1822-1891)

肥前国唐津藩主の長男(世嗣)。幕府老中。戊辰戦争で新政府軍に抗戦、箱館でも戦う。維新後は隠棲。

小笠原長生(ながなり)(1867-1958)

長行の長男。学習院、海軍兵学校に学ぶ。子爵。日露戦争では軍令部参謀。海軍中将。著書に『統合元帥詳伝』など。